

ずいぞろ

美術・博物館の展示案内のように、いろんなテーマで街案内をしています。人気は歴史探訪。特に、東京ドームシテイ界隈の転変をお話すると、「近代日本の象徴だ」と驚かれます。まず江戸から明治、大名屋敷町から工場街への急変。水戸



徳川藩邸が小石川後楽園を遺して軍需工場（東京砲兵工廠）に転用されます。関東大震災後、昭和初期に工場が移転するや一転、今度は野球場に。戦時中は軍事利用され、戦後は行楽地になりました。競輪場やプールなどを経て東京ドームが開設され現在に至りますが、周囲の景観との不調和や場外馬券売場の弊害が長く懸念されています。激変の街の悲喜、そこに民

人の記憶を街の歴史へ

坂本尚子(学芸員)

意は反映されてきたのでしようか？

「東京砲兵工廠」の基礎用れんがの一部は案内板付きで屋外展示されています。説明を読んでくださる方も多く、案内板の存在は重要です。「陸軍施設が近隣に集約され、工場は昼夜稼働していたと祖父が語っていた」「下請の仕事を家業で先代がしていた」など、往時を知る方のお話を引き出せることもありま

す。

そして戦後80年の昨年。90代の方の鮮明な記憶による体験談や証言を拝聴しながら空襲被災地跡を歩きましたが、いつもの光景が違って見えるほどの迫力で、あのときのことはいま世界各地で起きてることなのだと思ふにしみ入りました。

人の記憶を街の歴史へ。平和祈念こそ継承し、案内していきたいものです。

日本版

「女性の休日」アクション!

アイスランド女性の90%が、仕事や家事をいっせいに休み、ジェンダー平等へ社会を変えるきっかけとなった「女性の休日」。2026年国際女性デー期間(3月6・7・8日)にあわせて、日本版「女性の休日」アクションが呼びかけられています。シスターフッド(女性の連帯)を示すマークをいろんな素材でつくって、思い思いに赤いものを身につけてアピールしませんか。



◀編みこみモチーフ。アップリケにしたり、コースターに

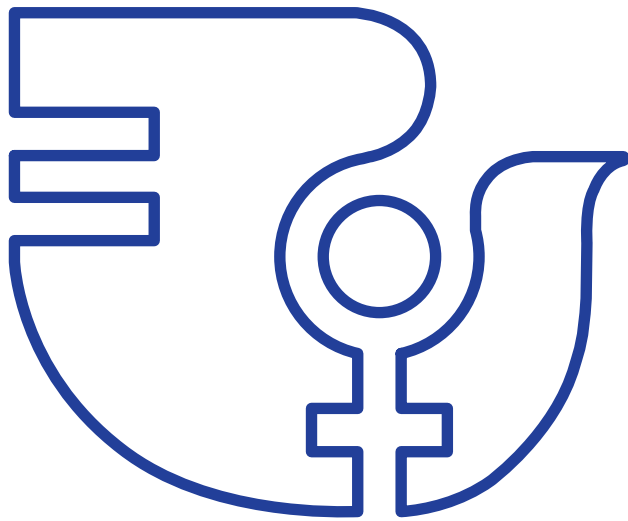


▶フェルトや布で。バッグやアクセサリーに

やるの？
できるの？
必ずやる!

映画『女性の休日』のキャッチフレーズより

★↓こちらをコピーして型紙に使ってね



◀「女性の休日」連帯のシンボルとなった国際婦人年(1975)のマーク。鳩、等号(イコール)平等であること、女性マークが組み合わされている



▲おでかけカバンにつけてアピール

BOOK

編集部

国会が開かれると思いきや、解散・総選挙。「何もしないまま」と読者からも。今こそ「しんぶん」

婦人しんぶん号外」を発行します。活用を。(は)

双葉社 1800円十税

文部科学大臣の清水義之が式典の最中に刺殺された。犯人は動機を新興宗教への恨みとする手記を発表、同じ宗教二世で幼なじみの作家は事件を題材に小説を書く。現実にあつた事件を思いおこさせる設定。宗教と文学、政治の癒着、宗教にのめり込む親を持つ子ども

の苦悩や孤独…。2人の視点で描かれた物語が結びついたときに見える。苦しい境遇の中で互いを理解し思いやる人が1人いることの大きさ。そこに希望が見える。

扶桑社新書 1000円十税

「陰謀論と排外主義」が日の丸とともに押し寄せる各地の現場をつぶさに観察し続けてきた7人の書き手による本書。SNSの普及で急速に拡散する陰謀論と、外国人排斥を主張する政治勢力が台頭してきた背景を解き明かし、現実の社会を揺り動かす政治的エネルギーと、その流れにあるらがるためのヒントが

つまっている。匿名性の高いネット情報に惑わされず、事実を冷静に見て判断するには何をすればよいか、大きな課題をつきつける。

暁星

湊かなえ

陰謀論と排外主義

分断社会を読み解く7つの視点

藤倉善郎 他6氏

代田知子さん 子どもの本 大人もぜひ!



ウマになれたらいいのにな

ソフィー・ブラッコール 作

山口文生 訳

(小学校低学年～)

ウマ年の今年。まずは、『ウマになれたらいいのにな』から。おしゃれをしてうれしそうに階段を下りてきたウマが、「ウマだったら いいのにな」という誰かの声とともに外に飛び出す。ウマになれたら、一日中走り回っちゃう。妹を学校まで乗せてあげるし、雨が降っても気にせずに泥んこになれる。誰かにお風呂に入れられることもない。こう願うのは誰？それが、ある状況下で日々を過ごさざるをえない少女だと分かるとドキッとします。そうだよ、ウマになりたいよねと、胸が締め付けられる。のびやかな筆で描かれるウマの何と美しいことよ。やりたいことを我慢してきた少女の願いが、強く強く伝わってくる。苦勞している人がいたら、せめてその心に寄り添いたい。



わたし、フードパントリーにいくの!

ダイアン・オニール 文

ブリジダ・マングロ 絵

横山和江 訳

(小学校低学年～)

『わたし、フードパントリーにいくの!』は、空腹で眠れなかった少女が、翌日、母親と食べ物を無料で分けてくれるフードパントリーという場所に行くお話。誰でも助けが必要なときがある。食べ物をもらうのは恥ずかしいことじゃないと、自然に伝えているの

がいい。

『そのときぼくは9さいだった』は、広島県の爆心地500メートル以内で被爆した、友田典弘(ともだつねひろ)さんの実話絵本。原爆で弟・母親と死別し孤児となった「つねひろ」を救ってくれたのは、朝鮮人の金さんだ。「おいていかないで」と泣く彼を息子にし、戦後は朝鮮に連れて行ってくれたという。こういう実話にふれると心底思う。排外主義なんてやめましようよ。



そのときぼくは9さいだった

あごうしゅうじ 文

小泉のみ子 絵

(小学校中学年～)

新日本出版社 1700円十税